

部員の地位に止まることはオール組合なる以上断じて認めることを得ない」と之を排斥し、加ふるにその救済方法を専ら考研せざるの行動に出たのである。茲に竹内の山下、篠田等に対する反目は厥ぶべからざるものなり、彼は復職の見惑もなく、新生活の補償を得る爲、稼ねて篠田、山下に反対を叫びつゝ、あつた電車部左翼系に働きかけ、本部乗取業を潜動して、こゝに刷新協議会の組織に迄發展せしめたのであつた。刷新協議会の行動目的は勿論徹底的本部の刷新にあるのであつたが、當初に於ては恰も軍独組合の結成を自指したかの如くに見られたのである。事実彼等は「京承」を「三」の発行及び協議会の開催等積極的行動に出で、同盟糾合、同会趣旨宣揚の爲極めを敏活なる活動を續けたのである。東交の主張する刷新目的は、黒派の派の而して刷新協議会の主張する東交本部革新目的は、黒派の派の大会を開催して東交の更生を計るべしとする主張と相通し、自ら西者は東交更生大会を同一目標として合流するに至り、五月中旬、刷新の解体を聲明するに至つた。

五 六月十三日開催東交更生臨時大会

自働部を中心とする篠田、山下一派は、大会開催反対の理由を先づ、六月の四月に至る迄の本部費の完納が先決問題なりと言ふ、或は當時紛糾如く極度に對立してゐた本部員間の感情的對立下に於て、大会開催は徒らに東交の混乱を深化せしむるものである。此の當時の状況を鑑みて到底期待し難き條件を以て、黒派の本部改造勸導に於ける大会開催延期を固持して譲らなかつたのである。斯の如く、四月、五月の頃は全く東交の内紛は最高潮に達し、黒派、篠田派の對立は加ふるに刷新協議会之に鼎立して互に暗躍する状態を見ては、或はは大会開催の運びに迄至らざして、東交は自壊するのでないかとさへ思惟せられたのであつた。此の間、舉行された五月五日の第十回大会に當つては、東交は左翼派メ「デ」の行進の司合團體であつた關係上、その内憂を隠して、労働者戦線統一の虚空な示威、約九百名の従業員各派より参加せしめられたのである。